

第3回ランドスケープ・フォーラム 都市公園制度150周年 ～都市公園の歴史・今・未来を語ろう！～

日時 令和5年1月27日(金) 14:00～17:30

場所 ランドスケープコンサルタンツ協会よりZoomで開催

参加者 97名

■司会 CLA広報副委員長 皆木信介

都市公園制度制定150周年記念事業推進委員会、(一社)日本公園緑地協会 会長 高梨雅明様 祝電披露

■開会の挨拶 CLA会長 金清典広

第1部 講演

① 都市公園の歴史とCLA

1. CLAと都市公園

～株式会社東京ランドスケープ研究所会長 CLA顧問 小林治人氏～

1960年代：都市公園事業とCLAの曙、1970年代：都市公園整備事業の発展、1980年代：国際的催事とCLA、1990年代：総合環境としての都市公園、2000年代：21世紀型都市公園の方向
2010年代：公園管理運営時代への準備、2020年代：With CORONA時代と生活文化激変した中での備え

2. 公園150年の歴史と計画・設計者の役割

～(一社)公園からの健康づくりネット理事長、(一社)公園管理運営士会会長 糸谷正俊氏～

太政官布達(1872年)以降、第1期(創成期1872～1922年)：太政官布達公園88ヶ所。都市計画的な公園(日比谷公園等)。西洋文化発信地。第2期(成長期1923～1972年)：防空防災、体力増強、国威発揚、児童の遊び場。都市計画施設、各種記念公園。第3期(拡大期・成熟期1973～2022年)：公園の多様化、グリーンインフラ、ウェルビーイング。事例：浜寺公園：ウェルビーイングの先駆け。日露友好の碑。官民共同で育てた。

② 都市公園の今の取り組み

3. 都市緑地とウェルビーイング

～株式会社公園マネジメント研究所代表取締役、World Urban Parks ジャパン理事 小野隆氏～

都市のみどりをつなぎ合せて暮らしを包むまちぐるみ公園へ。健康・経済・教育(Well-beingが関る)自然に身を置くことの絶対的な重要性、ストレス解消の場所と時間と、加えて健康上の利点を与える。非感染症のリスク多。みどりの役割は疾病に対する予防よりは健康になる要因(適度な運動、良好な人間関係など)を強化する役割(健康生成論)。→公園は人が社会性を保つために必要なスペース。

4. まちの未来をひらく新たなパークマネジメント

～NPO法人 NPO birth 事務局長、NPO法人 Green Connection TOKYO 代表理事 佐藤留美氏～

公園緑地からのみどりのまちづくり→環境資産(みどり)、地域経済(まち)、暮らし(ひと)の連携
公園緑地への期待(グリーンインフラの力をまちづくりに生かす)→Well-beingなまちづくり。
公園緑地はまちづくりの主役。公園特性+地域特性→産官学民→公園のオリジナリティ→事業計画へ
公園づくりのPoint①専門性・相乗効果で質向上。②官民双方に協働担当配置。③専門スタッフ配置。
未来型パーク&エリアマネジメント 公園群エリア分け、拠点公園から各エリアへ専門スタッフ派遣。



小林治人氏



糸谷正俊氏



小野隆氏



佐藤留美氏

第2部 意見交換

モデレーター CL A広報委員長 塚原道夫

●「都市公園の未来」東京農業大学名誉教授 近藤三雄氏の原稿を朗読 CL A事務局長 狩谷達之
パネリスト 小林治人氏、糸谷正俊氏、小野隆氏、佐藤留美氏、

萩野一彦氏（株）ランドプランニング代表取締役、千葉大学客員教授、LBA代表幹事）

●意見交換会の前に萩野氏より「ランドスケープ経営という新たな取組み」というテーマでの講演あり。

ランドスケープ経営研究会(LBA)：新たな時代の緑とオープンスペースの
ビジネスモデルを構築する。R2~R3年：計3回フォーラム実施。
マチミチコンペ in 大宮ウォークアブルシティに参画。住民自らが主体
となって、緑を育て、自らが事を起こしていく。店舗の緑化 → 通り全体
の緑化。ジェネレータ型の人材を育てる。LBAは地域情報を把握、地域に
の潜在力を引出し、官民の中間に立つ地域プロデュース支援組織を目指す。



萩野一彦氏

●意見交換

○小野：公園の維持管理だけのために行政が費用を出すことは難しい。都市全体(エリアマネジメント)の
緑を育て、ビジネスを発展させる民間の役割、行政の役割、ビジョンを明確にすべき。

○佐藤：ランドスケープの計画・設計に基づき、公園と建築物を融合させ、あらゆる人たちの連携を生む
場であることと、健康づくりの場であること。運営・管理は公園と建物のセットで考えることが良い。

○萩野：都市公園という枠から脱して、まち全体を対象とすることがこれからのランドスケープの将来像。
グリーンインフラを作る。95年前に全ての町が公園の中にあるという夢が描かれ、現実化されそう。

○小林：都市計画という概念はアメリカの顔となる都市を作ろうと、フィラデルフィアからワシントン
に移るときにやった。都市を作ることは専門特化した分野。ランドスケープを日本では造園と訳した。
産業として成り立つために、「ランドスケープ」とした。造園→修景、造景。その時代に適応した表現。
造園は幅広い。断定せず、深化していく。設景大学。景観。多様な発想で、今は脱皮の時期。

○糸谷：都市公園150年を経て公園面積10㎡/人までよく残って来た。都市公園法を守った結果。公園に
対する期待が従来と変わってきた。公園からまちづくり、いろいろなつながりを見ると今までの
ままで良いのかと考える。公園で事業をしようとするとか、何かを守らねばならない
という考え方を変えていけば良いのでは。意欲ある若い人たちの夢を持続させ、人材を受け入れる業界
の姿勢が必要。業界全体のリーダーシップを取り括りのある仕組みをリードするがCLAの役割と期待。

○小林：都市公園法の守るべきものと変えていくものを提言することがCLAの役割。自由・闊達に。

○糸谷：都市計画法は、健康で文化的な都市生活を生み出すことが目的。その一角に都市公園がある。

○小林：それぞれの団体、設計者が自分の姿・位置を知ることが大切。戦争中苦勞して守り、継続して
きた都市公園の意味がある。

○佐藤：公園の範囲をもっと広げる、まち全体が公園と考えると、ランドスケープの仕事は一気に広がり
経済効果も高まる。みんなでやるモチベーション、緑を増やす、まちづくりのビジョンが増える。

○小林：CLAの会員の得意技として分科会的なものあり。日本のノウハウを輸出する。日本で体験した
ことを海外で実践すると期待以上の効果があった。業界の境界はなく、ビジネスの境界はあるが、それ
を意識してCLAが、それらのつながりを広げていくことが役割ではないか。

○糸谷：新型コロナ以降、ニューヨークでは公園を閉鎖したところ、市民が市長に掛け合い、公園利用が
再開された事例あり。民間の力が都市公園を変えた。市民に公園の価値を伝えていくことが必要。

○萩野：公園も緑地も河川も道路、住宅地もグリーンインフラ認定が取れると、社会的課題が解決される
効果がある緑地だと、国・自治体が認識し支援が得られ整備が進む。ウェルビーイングな公園が増える。

○小野：健康も手段のひとつ。ウェルビーイングが一番上にある概念。緑が関わっており、人間が動物の
中で進化した本質が絡む。何を実現していくかビジョンをしっかりと見定めておく必要あり。

○小林：本来の身の丈に合った仕事をして、責任をもって社会に貢献していく、オピニオンリーダーと
してCLAがその役割を果たしていく。これまでの経験で多様な人がやらないといい公園ができないと
感じた。今はいろいろな人がおり、今後の期待が大きい。

■閉会の挨拶 CL A副会長 金子隆行

